

「創世記2:10-14におけるエデンと四つの川について ——現在の五書研究を踏まえて——」

見 城 康 佑

1. はじめに

私は、博士前期課程で修士論文「創世記2:10-14におけるエデンと四つの川の意味について」を執筆した。大まかな内容は以下である。

- ① 創世記2:4b-3:24の楽園物語は五書の中ではヤハウイストに属すると考えられて来た。この論文でも、その立場を取っている。しかし、ヤハウイストの範囲についてはH.W.ヴォルフの「ヤハウイストの宣教」¹⁾の理解に立ち、民数記25:5で終わると考える。また、それをさらに発展させたカール・ヴァルケンホルストの説²⁾を取り入れ、ヤハウイストの成立年代を捕囚後に設定した。
- ② エデン（179）の語源、意味について考察し、創世記2:10-14の先行研究でしばしば考察されてきた「エデンの場所はどこか」について検証した。その結果、エデンから流れ出て四つに分かれたと記される川、ピション、ギホン、ヒデケル（新共同訳ではチグリズ）、ペラト（新共同訳ではユーフラテス）について詳しく調べていくと、これらの川が現代の地理学でどの川に当たるかを特定するのは極めて困難であると結論づけた。
- ③ 創世記2:10-14のエデンと四つの川について、論点を二つに絞った。そ

れは、第一にエデンから川が流れ出て別れた四つの川が、おそらく当時よく知られていた川であったということから、この四つの川は世界を取り巻いて潤す川であり、エデンを流れる川がその源であったということ。第二に、四つの川の一つがギホンという名であり、それがエルサレムの重要な水源であったギホンの泉と同名であるということである。

- ④ エデンから流れるギホンは川であり、エルサレムのギホンは泉である。エルサレムに川は流れていない。しかし、エルサレムを流れる川というイメージは旧約聖書の他の箇所に見ることが出来る（詩36:9、46:5等）。エデンから流れる川が四つの川となり世界を潤していたという記述は、エゼキエル書47章に代表される、終末時に神殿の水源から大河が流れ出て命を与えるというイメージを想起させる（他にはヨエ 4:18、ゼカ 14:8、黙 22:1-2）。そのことから、エデンから流れるギホンは、終末時にエルサレムの水源ギホンから流れる川と結びついているのではないかと考えられる。
- ⑤ エデンから流れ世界を潤す四つの川のイメージは、イザヤ書55:1-5に代表される終末時の諸国民の救いのイメージと重ねられる。それらのことから、創世記2:10-14におけるエデンと四つの川は、捕囚後の時代にヤハウイストが書いたものであり、終末における全世界の救いの姿を描いたものではないかと考えられるのである。

私は、博士後期課程において、この研究テーマを引き継ぎ、さらに深めていく方針を定めた。そこで、私は修士論文では創世記2:4b-3:24の楽園物語はヤハウイストに属するという前提の上で論を立てたが、小友聡教授からヤハウイスト、ひいては五書問題についての考察が十分でなく、まず現在の五書研究をよく整理する必要があることをご指摘いただいた。まず、そのことをより深く突き詰めていくところから私の博士後期課程での研究が始まった。

2. 五書研究の現在

現在の旧約学において、モーセ五書の研究は非常に複雑化し、混乱した状況にある。ヴェルハウゼン以降、J、E、D、Pという文書とその形成の順序は長らく五書研究の基本とされてきたが、今日ではそれは多くの批判にさらされている。

五書研究の状況が大きく変化したのは1970年頃からである。この時期から、特に当時の文書仮説に大きな影響を与えていたフォン・ラートを批判するところから、五書研究を発展させていく。その構想は大きく三つの方向に分けられる。①徹底的に文書仮説そのものを批判し、ヤハウイストの存在を否定する方向、②ヤハウイストというものは存在しないとしながら、捕囚以前に一つの貫した物語の収集を認める方向、③従来の文書仮説を残しつつ、ヤハウイストが捕囚期以降の、おそらく五書の文書資料の中ではもっとも新しいものだとする方向、である。

2-1. レントルフ／ブルームの構想

ヤハウイストの存在を否定する方向を打ち出したのは、フォン・ラートの弟子のR. レントルフであった。フォン・ラートを批判し、当時の五書研究の常識を根底から覆す彼の主張は五書研究に広く衝撃を与えた。フォン・ラートは、ヤハウイストに五書（六書）の最終的形成の中心的な役割を与え、五書全体の形成を担ったのはヤハウイストであったと考えた。レントルフは、そのことに問いを投げかける。レントルフはフォン・ラートの文書仮説の中でヤハウイストの文書の関連性が曖昧であることを指摘し、ヤハウイストの実在性そのものが不確かであると批判した。その結果、五書全体の形成を規定するヤハウイストが否定されることによって、エロヒスト、祭司文書も独立した文書とは認められなくなり、文書仮説そのものが否定されたのである。³⁾

このレントルフの方向をさらに精緻化したのがレントルフの弟子であるブ

ルームである。レントルフは、文書仮説を批判し、五書全体の形を作り出したのは「申命記の刻印を帯びた改訂層」であるとした。ブルームはこの申命記史家の影響下にある五書の構成、すなわち申命記史家的構成（KD）と、この構成を修正する祭司的構成（KP）というものを考えた。そして、この二つの構成によって五書は形成されると考えられるのである。このレントルフ／ブルームの構想においては、申命記史家的構成によって五書という全体がはじめて筋道を見出される。そして、五書というものの全体の編集の最終段階ないしは最終的な枠組みが設定された段階に決定的な意味があると考えられる。⁴⁾

ただし、この構想にも批判はある。ブルームは表現や言い回しがどのような分布で出て来るかを調べ、言語表現上どこどこが対応するかを確認し、それらにドラマのような構成があることを結論として引き出す。それがKDとKPであるが、ブルームは対応ということばかり指摘し、矛盾や食い違いが無視されているのではないかと指摘される。⁵⁾

また、ブルームは神名交替や叙述重複をもとにして文献批判をし、文書資料に分けることを拒否する。しかし、だとすれば彼の言う祭司的構成（KP）の存在を何から導き出すのであろうか。ブルームはどこが祭司文書層に属するか、研究史上驚くほど一致が見られるからという理由で、従来の研究結果を用いている。つまり、文献批判を否定しながら文献批判の成果を用いるという自己矛盾に陥っているのである。⁶⁾

2-2. ミュンスター・モデル

次に、ヤハウィストというものは存在しないとしながら、捕囚以前に一つの一貫した物語の収集を認める方向がある。これは、ツェンガー、C. ドーメン、ホスフェルトの三名のカトリックの学者たちによる「ミュンスター・モデル」と呼ばれる。⁷⁾

この構想では、まず紀元前700年頃にアブラハム、ヤコブ、ヨセフ、出エジプト、土地取得の物語を結び付けた「エルサレム歴史著作（JG）」を想定する。JGは、五書形成史上最初の歴史著作である。ツェンガーらは、紀元前722年の

北王国滅亡によって南王国ユダの直面した危機が、北王国滅亡の原因を考察し、ユダが滅亡を回避するための神学的作業を要求したであろうことを想定する。そして、マナセの宗教混淆政策（王下21:7にマナセが神殿にアシェラ像を造ったことが記される）に対抗する改革プログラムとして、この歴史著作JGが執筆されたのだという。⁸⁾

ユダの破局の後、捕囚時代にJGに加えて原初史（創二2:4b-8:22）、「契約の書（出20:22-23:33）」、原申命記と申命記史家的拡張（申1章－ヨシュ 22章）、そして士師たちと王たちの物語（士師・サムエル・列王）が結合されて「捕囚の歴史著作（EG）」が生まれ出された。さらにEGに対抗して捕囚末期に祭司的歴史（Pg）が成立し、その後、拡張（Ps）が行われる。そして、紀元前450年以降、申命記史家的神学と祭司的神学の妥協として、またネヘミヤによって遂行されたユダヤ地方の諸グループの調停の結果として、創1:1から王下25章に至る「捕囚後の大歴史著作」が作り出された。そして、前400年頃、エズラによって「律法（トーラー）」が独立の作品として公布され、同時に「前の預言者（ヨシュ－王下）」が生まれたのである。⁹⁾

このモデルの成否は、当然のことながら、JGの一貫した形式的内容的特質をテキストの上に追っていくことができるのかどうかにかかっている。しかし、その検証は未だ十分になされているとは言えない。それゆえ、このモデルはまだこれから検証を深めていくべきものである。¹⁰⁾

2-3. ヤハウイストの存在を前提とする構想

最後に、ヤハウイストの存在を現在でも認める方向である。しかし、この方向では従来の文書仮説と違い、ヤハウイストを捕囚後のものとして捉えなおす。この議論の代表者はJ. ファン・セータースであるが、彼はヤハウイストは第二イザヤと同時代人で捕囚期末期の著者であり、申命記を除く四書の中で祭司文書に属さないすべてのテキストを執筆した人物であるとする。また、彼は時代的にヤハウイスト文書の方が申命記資料より後の時代のものであるという。出エジプト記から民数記まで記されているヤハウイストのテキストは、申

命記資料に影響を受けたものであり、多くの場合、文学的に申命記資料に依存している。¹¹⁾

日本では並木浩一がヤハウイストをペルシア時代初期と位置付けた。並木浩一は、ヤハウイスト的な文書（ヤハウエ文書）とヤハウイストを区別し、それはヤハウイストの時代には既に文書化されていたと考える。それに手を加えてこの文書の各段落に文脈を与えた解釈者がヤハウイストなのである。¹²⁾そして、ヤハウイストの終わりを出エジプト記24章11節までであると考え、イスラエルを神の前での食卓共同体として描いているのだと考える。¹³⁾

私の修士論文においても、カール・ヴァルケンホルストの構想を受けてヤハウイストを捕囚後として設定した。このようにヤハウイストを捕囚末期もしくは捕囚後に位置づける方向には一定の説得力があるように思う。しかし、ここで問題になるのは、具体的にどの文章がヤハウイストの文章になるのか、また、ヤハウイストの範囲がどこまで終わるのか、研究者によって一定しないことである。これをどのように明確化していくかはこの構想での課題であろう。また、ヤハウイストという一人もしくは複数の「思想家」がいたかということは、私には疑わしいように思える。ヤハウイストがどのような思想をもってその文書を構成し、また執筆したか、それはヤハウイストの範囲と同じく一定せず、はっきりとしない。

2-4. 結論として

以上の大きな三つの方向性が、従来の文書仮説、とりわけフォン・ラートへの批判から始まり、生まれていった。ここで、私がどの方向を取り得るかを明確にしたい。私は、この三つの方向の中では、ミュンスター・モデルが最も説得力があるように思う。これは最も新しい考え方で、まだ先に課題を残したモデルであるが、これが従来の文書仮説より優れているのは、原歴史、アブラハム、イサク、ヤコブ、出エジプト、土地取得といった個別の伝承で分け、これらを集積し歴史書としてまとめたものとしてJG、EGといった著作を構想したところである。ここでは、人によって範囲が違っているヤハウイストを構想に

入れるより、範囲は明確である。そして、それらが段階を追って大歴史書となり、現在われわれが知っている律法（トーラー）と前の預言書へと分けられていったという過程も分かりやすく、明確である。

ここで私の研究範囲である創世記2～3章、原初史の中の楽園物語はどのように位置づけられるか。ミュンスター・モデルを参照するならば、原初史が個別の伝承であったところからより大きな著作の中に入れられたのは捕囚的歴史著作（EG）においてである。修士論文での私の論の一つの核になっているのは、楽園物語が捕囚期以降のイスラエルの思想を反映しているということである。楽園物語を素直に読むならば、これはすべての人間がもともとは一つであったということを語っている。さらに、最初に提示した創世記2:10-14のエデンと四つの川の意味を考えるなら、これはイスラエルに限らない、諸国民を含めた全世界の救いに向かう救済観をも示しているだろう。このような救済観は、捕囚期以降に現れたものである。それが捕囚期歴史著作として、イスラエルの歴史に入ってきたというのも、この構想に説得力を感じられる一つの理由である。

3. 今後の展望

従来 của ヤハウイストを前提とする文書仮説から、新しくミュンスター・モデルを土台として論を立てていくことが決まった。その上で、これからどのように発展させていけるだろうか。まず、創世記2:4b-3:24を捕囚期の著作としたことから、今度はこれに対応する他の旧約聖書の箇所との関連を調べていくことが必要であろう。

第一に、エゼキエル書である。エゼキエル28章には創世記の楽園物語とよく似た原人物語が記されているが、この箇所との関わりは調べておく必要があるだろう。また、43章には神殿の水源から水が流れ出て大河となる幻が記される。この記述の成立年代や時代背景が分かれば、創世記のエデンと四つの川の描写と関りがあるかどうか、あるならばどのような関わりであるかをある程度

見ることが出来るであろう。

また、それとの関連で、詩編などに見られるエルサレムを流れる川のイメージについても調べられたらよいと思っている。初めに記したように、エルサレムに川は流れていない。しかし、エルサレムを流れる川のイメージが聖書の他の箇所にも見られるとしたら、それがどこから来たものであるかを考察していくことで、創世記のエデンと四つの川のイメージの原点をも見極めることができるのではないだろうか。

(みしろ こうすけ)

【参考文献】

大住雄一「モーセ五書批判概観」『総説 旧約聖書』（日本キリスト教団出版局、2007年）

木幡藤子「最近の五書研究を整理してみると」『聖書学論集 28』（日本聖書学研究所、1995年）

並木浩一「ヤハウィスト考」『ヘブライズムの人間感覚〈個〉と〈共同性〉の弁証法』（新教出版社、1997年）

魯恩碩「旧約文書の成立背景を問う：共存を求めるユダヤ共同体」（日本キリスト教団出版局、2017年）

ヴァルケンホルスト・カール「ヤーヴィストの宣教」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要 第十七号』（慶應義塾大学言語文化研究所、1985年）

ラート.G.フォン「六書の様式史的問題」『旧約聖書の様式史的研究』（荒井章三訳、日本基督教団出版局、1969年）

レントルフ.R「モーセ五書の伝承史的問題」（山我哲雄訳、教文館、1987年）

Blum Erhard, *Studien zur Komposition der Pentateuch*, Berlin ; New York : de Gruyter, 1990

Wolf.H.W, "THE KERYGMA OF THE YAHWIST", translated by Wilbur A.Benware, *The Vitality of Old Testament Traditions*, by Walter Brueggemann and H.W.Wolff, Atlanta, 1975

Zenger Erieh, *Einleitung in das Alte Testament*, 3. neu bearb. und erw. Aufl, Stuttgart : W. Kohlhammer , 1998

注

- 1) H.W.Wolf, "THE KERYGMA OF THE YAHWIST", translated by Wilbur A.Benware, *The Vitality of Old Testament Traditions*, by Walter Brueggemann and H.W.Wolff, Atlanta, 1975
- 2) カール・ヴァルケンホルスト「ヤーヴィストの宣教」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要 第十七号』（慶応義塾大学言語文化研究所、1985年）。
- 3) R.レントルフ「モーセ五書の伝承史的問題」（山我哲雄訳、教文館、1987年）162頁。
- 4) 大住雄一「モーセ五書批判概観」『総説 旧約聖書』（日本キリスト教団出版局、2007年）150-151頁。
- 5) 木幡藤子「最近の五書研究を整理してみると」『聖書学論集 28』（日本聖書学研究所、1995年）12-13頁。また、39頁注40にて、木幡はブルームの論の立て方にどのような問題があるか、具体的な例を挙げて指摘している。
- 6) 上掲書、13頁。
- 7) 大住雄一、167頁。また、Erieh Zenger, *Einleitung in das Alte Testament*, 3. neu bearb. und erw. Aufl, Stuttgart : W. Kohlhammer , 1998, S.119-120.
- 8) 大住雄一、168頁。
- 9) 上掲書、169頁。
- 10) 上掲書、169頁。
- 11) 魯恩碩「旧約文書の成立背景を問う：共存を求めるユダヤ共同体」（日本キリスト教団出版局、2017年）72頁。
- 12) 並木浩一「ヤハウィスト考」『ヘブライズムの人間感覚 〈個〉と〈共同性〉の弁証法』（新教出版社、1997年）233頁。
- 13) 上掲書、234頁。また、260-261頁。